

歴史地理学会 50 周年記念国際会議巡検報告

歴史地理学会50周年記念国際会議の最終日にあたる2007年9月10日(月)、「江戸・東京における環境変化と景観変質」をテーマとしたエクスカージョンが行なわれた。参加者は17名、うち6名が今回の国際会議で講演をお願いした国外招聘者の方々であった。

午前9時過ぎ、招聘者の方々の宿泊場所となったホテルメトロポリタン＝エドモントに集合し、バスにて出発した。参加者には、巡検のルートマップをはじめ、今回の巡検先となる新宿・六本木・お台場・浅草などの英語版資料、さらに当該地点の江戸名所図会・切絵図や明治・大正期の地形図のコピーなど、詳細な資料が訪問順に並べられたファイルが配布された。

靖国神社・神田川などを車中から目にしながら、バスは西へ進んだ。やがて、最初の巡検先となる新大久保にさしかかり、資料に基づきながらコリア＝タウンについての説明がなされた。コリア＝タウンが有名な新宿区であるが、説明によれば、中国やミャンマー・フィリピンなど他のアジア諸国出身者も相当数居住しているとのことであった。筆者自身、この界隈を通るのは初めての経験であったため、車窓に見えるハングルをはじめとする外国語の看板の多さに驚かされた。

次に向かったのは新宿の東京都庁である。ここではバスを降り、45階にある展望台に上った。あいにく雨天であったものの、西新宿一帯の高層ビル群をはじめ、東京タワーなどの眺望を楽しむことができた。招聘者の方々は、写真を撮影したり、ビル群の写った絵葉書を購入されたりしておられた。ここでは外国人観光客の姿も数多く見かけた。

都庁を後にし、首都高速道路経由でお台場に向かった。途中、六本木を通過する際、六本木ヒルズに代表される都心の再開発につい

て説明があり、東京の開発の画期として関東大震災と第二次世界大戦があげられること、近年では都心への回帰現象がみられることなどが述べられた。

バスはレインボー＝ブリッジを渡り、お台場に到着した。海浜公園で下車し、「台場」の地名の歴史的経緯や今日の臨海副都心開発に関して説明のあった後、参加者全員での記念写真を撮影した。そして、ショッピング＝モール内のレストランで昼食をとった。海外の方々和日本側の参加者が交じりあい、和やかな雰囲気のある食事となった。昼食後、時間に余裕があったため、ショッピング＝モール内を歩いた。個人的には、昭和30年代頃の商店街を再現した一角がお台場に設けられていることが興味深く、最近のレトロ＝ブームの一端をみる思いであった。

午後最初の巡検先は両国の江戸東京博物館であった。常設展を約1時間かけて見学したが、招聘者の方々には江戸の大名屋敷や町並みの復元模型などが大変興味深かったようで、時間が短く感じられた。また、大相撲開催中であった隣接の国技館の外観や力士幟を見に行かれた方もいた。

最後の巡検先となった浅草寺に向かって隅田川を渡る際、独特の外観をもつアサヒビール本社ビルについて車中で話題となった。日本側の参加者がビールジョッキをイメージした建築としてランドマークとなっていることを説明したが、奇観に納得していただけたかどうかは定かではない。浅草寺到着時には幸い雨も上がり、参加者は、賑やかな境内や仲見世通りを思い思いに散策していた。

帰路の車中では、招聘者を代表して、シェンク先生(ドイツ、ボン大学)よりお礼の挨拶があった。午後6時前、出発地点のホテルにて解散となったが、巡検を含め3日間にわ

たる国際会議で交流が深められたこともあり、参加者が別れの挨拶や握手を交わし合う姿が印象的であった。

巡検全体を通して、招聘者の方々は「ここはどこか」、「あれは何か」といった問いを終始発しておられ、その知的好奇心の旺盛さに圧倒される感があった。また、それらの質問に応じ、議論を交わすことによって、日本側

の参加者にとっても江戸・東京を再発見する一日になったように思われる。

末筆ながら、本巡検の企画立案から当日の案内までを担当された古田悦造（東京学芸大）・福島義和（専修大）・天野宏司（駿河台大）の各先生、さらに当日通訳の労をとられた矢ヶ崎典隆先生（東京学芸大）に感謝の意を表したい。

（三木一彦）